

メールマガジン「ガゼッタ」まとめ(2)

第6号～第10号(2012年10月15日～11月25日配信)

配信した「ガゼッタ」No.6-10のまとめです。書式と一部表記を変更して図版を取り込み、pdfにしました。



ガゼッタ第6号をお届けします。
今回は、8月にアン・デア・ヴィーン劇場で観劇した《湖の女》の感想です。

▼2012年8月12日アン・デア・ヴィーン劇場《湖の女》▼

Rossini: La donna del lago
Theater an der Wien
Leo Hussain, Conductor
Christof Loy, Director
Malena Ernman, Soprano: Elena
Luciano Botelho, Tenore: Giacomo
Gregory Kunde, Tenore: Rodrigo
Varduhi Abrahamyan, Mezzo-soprano: Malcolm
Maurizio Muraro, Basso: Douglas
Benedicte Tauran, Soprano: Albina
Erik Arman, Tenore: Serano
ORF Radio-Symphonieorchester Wien
Arnold Schoenberg Choir



今年8月のオペラ旅行で筆者が大いに期待した公演の一つが、アン・デア・ヴィーン劇場のロッシーニ《湖の女》でした。アン・デア・ヴィーン劇場は1801年に開場し、ベートーヴェンが1803～4年に上階に住み、《フィデリオ》の初演劇場としても知られます。現在は主にミュージカルや芝居に使われ、筆者にとっては今回が2度目。座席は窮屈ながら内部は19世紀の姿をとどめ、舞台も観やすいので好きな劇場の一つとなっています。

《湖の女》は8月10日が初日の5回公演で、私は2日目(12日)を観劇しました。クリストフ・ロイの演出、レオ・フセイン指揮ヴィーンORF放送交響楽団&シェーンベルク合唱団。ヒロインのエレーナを歌うマレーナ・エルンマンは以前NHK・BS「驚異の歌声」でも紹介されたスウェーデンの歌姫、ジャコモ5世は「ブラジル最高のベルカント・テノール」と称されるルシアノ・ボテリョ、ロドリゴ役はロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでお馴染みグレゴリー・クンデ、マルコム役はアルメニア人ヴァドゥイ・アブラミヤンというキャストです。テノールのボテリョは、今年11月28日～12月9日の新国立劇場《セビリアの理髪師》のアルマヴィーヴァ伯爵で来日を予定しています。

期待が大きすぎたこともあり、不満の残る結果となりました。ロイの演出は予想通りの現代化で、舞台上に劇場の小舞台を設け、歌手たちは《湖の女》を演じる役者たち、といった設定です。それはそれでありがちなコンセプトなのですが、理解しがたいのはエレーナの相手役マルコムがエレーナの分身であること。マルコムはそもそも男装コントラルト歌手のために書かれ、エレーナを愛する反乱軍の騎士という役柄なのに、この演出では髪型も衣装もエレーナと瓜二つの女性なのです。その辺の違和感がどうにも拭えません。ちなみにこのプロダクションはジュネーヴ大劇場との共同制作で、2010年5月ジュネーヴが初出でした。

歌手はクンデを除いてみな初聴きですが、簡単に感想を言えば、マレーナ・エルンマンは声が小さく、コロラトゥーラのテクニックも特殊でベルカントのレガートが無くフレージングはあくまでポップス的。表情や歌い口は明らかにバルトリがお手本らしく、その理想に向かって自己流に鍛え上げたという感じ。個人的にはそこがとても面白かったのですが、歌のコンセプトがずれているのでロッシーニ歌手としては不資格でしょう。ジャコモ5世役のルシアノ・ボテリョは1975年にリオデジャネイロで生まれたテノール。2001年に《魔笛》タミーノでデビューし、ヨーロッパ・デビューは、なんと2007年ナントの《オリー伯爵》タイトルロール!(いちおうダジャレ付き)。2010年にグランドボーンの《ラ・チェネレントラ》でドン・ラミーロ、2011年にロイヤル・オペラハウス《セビリアの理髪師》アルマヴィーヴァ伯爵とジュネーヴ大劇場《オリー伯爵》オリーを歌うなど、ロッシーニ歌手としてキャリアを築いています。その声は柔らかくてテクニックもあるけれど、声の響きが薄く、ヴォリュームに欠けるのが難点。ローレンス・ブラウンリーが一番近いテノールという印象です。

二人とも声が小さいのは劇場が音響面でデッドだから、と思っていたら、グレゴリー・クンデの第一声でそうじゃないと判りました。普段どおり力強く逞しいクンデの声が「ガツン」と飛んできたからです。あとはもうクンデー人勝ちみたいな印象で、他の歌手が回んでもクンデが歌えば満足度がぐっと上がる、そんな感じでした。マルコム役のヴァドゥイ・アブラミヤンも技術面に過不足なく良かったのですが、不幸にして「なんで女なんだよ」との思いが抜けぬまま。最後に花嫁衣裳のエレーナがジャコモ5世と結ばれる読み替えも理解しがたい……。

当日のアクシデントは、クンデが登場カヴァティエナの途中で左手に持ったグラスを握り潰す演出。グラスが粉々に砕ける仕掛けなのですが、クンデがやや不安げに手の粉を払い、とっさにハンカチを取り出して手をぐるぐる巻きにしてカバレッタを歌いました。その後もときどき手の様子を気にしながらの演技で、舞台近くの座席の筆者にはハンカチが赤く染まっているのが見え、やはり怪我をしたようでした。

とはいえオペラの出来は毎回異なり、印象や感想も一定ではなく、座る席によっても見え方と聞こえ方が違います。お仕事としての批評を別にして、私は基本的に「楽しむ」目的で劇場に足を運びます。多少の不満はあっても良いところを見つけ、「楽しかった」「観て良かった」と思うようにしています。ロイの演出も、エルンマンもボテリョも、個人的総括は「楽しかった」「観て良かった」でした。2度観れば、もっと好意的になったでしょう。ここに書いたのも、時差ぼけが抜け切らぬうちにたった1回観た後の個人の感想にすぎず、新国立劇場《セビリアの理髪師》のボテリョを楽しみにしています。なお、ネットではボテリョをメキシコ人とする文章もありますが、正しくはブラジル人です。HPでご確認ください。<http://www.lucianobotelho.com/>

(2012年10月14日 水谷彰良)

★★★★★HP 管理人の話題★★★★★

だんだんと秋らしくなってきましたね。♪枯葉よ〜♪なんていう歌が聞こえそうですが、枯葉というとパリ、そして公園や墓地を思い浮かべませんか。

さて、今回はパリの代表的な墓地であるペール・ラシェーズ墓地の話です。多くの観光客が訪れる場所でもあり、すでにいらっしゃったことのある方も多いかと思いますが、私はやっと昨年12月に行く機会がありました。パリの東20区にあり、バルザックやブルースト、ショパン、エディット・ピアフ他多くの著名人が眠っており、1868年にパリで亡くなったロッシェニも1887年にフィレンツェのサンタクロチェ教会に改葬されるまでここに埋葬されていました*。

お墓の写真をHPに掲載してあります。<http://societarossiniana.jp/gallery.html>

ロッシェニの墓は墓地正面入り口から伸びるメインストリートにあります。メトロの3号線のペール・ラシェーズ・Pere Lachaiseで降りるとすぐ目の前にあります。枯葉を歌ったイヴ・モンタンもここに埋葬されています。メトロの階段を上るとお花屋さんもありますし、墓地の地図を売っているおじさんも入口にいます。墓地には著名人のお墓の位置を示す案内図もあります。

お墓のサイト <http://pere-lachaise.fr/>では、テーマ別に絞って検索することができ、作曲家で検索もできます。これから、パリにご旅行予定の方、ロッシェニのお墓は空ですけど、ペール・ラシェーズの散歩はいかがですか。



▼*水谷氏よりお墓に関するコメント▼

パリのロッシェニの墓ですが、現在の場所に埋葬されたのは死んだ後ではなく、死の1年後の1869年11月10日にそこに埋葬されたのです。ペール・ラシェーズ墓地にロッシェニ家のお墓がなかったのも、とりあえず歌手アルボニーの夫ペーポリ伯爵家の墓にお邪魔していたのです。ぼくは10年ほど前にそのペーポリ伯爵の墓をペール・ラシェーズで偶然発見し、写真に撮りました(前述のページに掲載)。ちなみに墓地の検索でAlboniやPepoliを入れても出てきません。



ガゼッタ第7号をお届けします。

本号は、ドイツ・ロッシェニ協会によるロッシェニ・オペラの台本対訳叢書の新刊『セミラーミデ』、ボーマルシェの喜劇『セビーリアの理髪師』に着想を得た新作長唄「徒用心一重宝髪結」の公演案内、今年8月イタリアの新聞付録でゲットしたロッシェニCD、これに関連したマルケ室内楽フェスティバル「アルモニエ・デッラ・セーラ」の四本立てでお届けします。

▼ドイツ・ロッシェニ協会によるリブレット対訳叢書の新刊『セミラーミデ』発売!▼

©Gioachino Rossini, Semiramide (Operntexte 34) Text von Gaetano Rossi. Libretto Italienisch/Deutsch, übersetzt und herausgegeben von Reto Muller.,Leipzig,Leipziger Universitätsverlag,2012. 価格:10ユーロ

日本ロッシェニ協会とドイツ・ロッシェニ協会……一見なんの関係もなさそうに思われますが、実はそれなりに深い関係にあります。というのもドイツ・ロッシェニ協会の事務局長レート・ミュラー(Reto Muller)と筆者は15年来の知己で、それぞれの協会の事務局長として交流を重ねてきたからです。こちらのHPも時々見られるらしく、先月には「日本ロッシェニ協会のHPが無くなったのか?」とメールが来たので、新たなURLを教えると、「Bellissimo, eccellente! complimenti!! (すごくきれい、素晴らしい! おめでとう!!)」と褒められました(言うまでもなく管理人Oさんの功績です)。

現在はロッセーニ研究者として国際的にも有名なレトがライプツィヒ大学出版局からロッセーニ・オペラのリブレット叢書（イタリア語／ドイツ語）の出版を開始したのは2011年。最初に『イタリアのトルコ人』と『ブルグントのアデライデ』を刊行し、今年3月に『ひどい誤解』、6月に『アディーナ』、9月に『セミラーミデ』が発売されました。

原語とドイツ語の対訳ですから日本の私たちには無縁かもしれませんが、この機会に紹介しておきましょう。ドイツ語の序文と解説、あらすじ、対訳から構成した冊子で、アリア、重唱などの歌唱部分は網掛けで表示し、改訂版の歌詞を付録としてその部分を枠で囲むなど、簡便にして見やすい作りになっています。価格も8～10ユーロとお手頃。アマゾンなどのサイトから取り寄せ可能です。

http://www.amazon.co.jp/Gioachino-Rossini-Semiramide-Reto-Mueller/dp/3865837018/ref=sr_1_1?ie=UTF8&qid=1350803092&sr=8-1

ドイツ・ロッセーニ協会の出版物全般はこちらをご覧ください。

<http://www.rossinigesellschaft.de/soc/publd.html#OT>



▼新作長唄「徒用心—重宝髪結」公演のご案内（第18回 蘭黄の会、11月6日、国立劇場・小劇場）▼

『セビーリヤの理髪師』を題材にした日本舞踊作品（新作長唄）『徒用心』が11月6日（火）、半蔵門の国立劇場・小劇場で演じられます（第18回 蘭黄の会、19時開演）。作・演出・振付は高名な日本舞踊家・藤間蘭黄（ふじまらんこう）さん。ポーマルシェの喜劇（ロッセーニのオペラの原作）に着想を得た新作で、題名の「徒（あだ）用心」は原作の副題「無駄な用心」、「重宝髪結」は「フィガロ」というわけです。

ロッセーニの音楽と関係がなくても、『セビーリヤの理髪師』を熟知するロッセーニ愛好家には興味深い演目でしょう。ちなみに長唄とクラシックの音楽は発音が根本的に異なりますが、ポルタメントやレガートをを用いる音楽的朗誦の様式、特殊な区節法、メリスマを用いる節回しは「日本固有のベルカント」と言えるべきもの。邦楽に関心が無くても、歴史的な発声歌唱の諸問題に興味のある方にはお勧めです。

詳細は次のチラシをご覧ください（上部をクリックすると裏面もご覧いただけます）。

http://www.geocities.jp/rankoh_f/tirashi2012

会場は、半蔵門の国立劇場・小劇場。初台の「新～」ではありませんので要注意！（「無駄な用心」ですね）。

▼地方紙「Il Resto del Carlino」付録のロッセーニ CD をゲット！（8月18日）▼

◎Gioachino Rossini, La musica da camera con pianoforte

（ジョアキーノ・ロッセーニ、ピアノ伴奏付き室内楽曲集）

Supplemento al numero odierno de QN il Resto del Carlino (18 agosto 2012) CD

演奏：Marco Sollini (pianoforte), Francesco Manara (violino), Massimo Polidori (violoncello), Fabrizio Meloni (clarinetto), Danilo Stagni (corno), Salvatore Barbatano (pianoforte)

日本でも女性誌の付録は珍しくありませんが、新聞の物品付録は筆者の記憶にありません。ところがイタリアでは新聞にも結構な付録がつくのです。筆者はそうした付録を何度も入手しており、重いので持ち帰るのを諦めた立派な書籍や第2次世界大戦のドキュメンタリーDVD などさまざまなアイテムがありました。こうした付録は、当日普通に新聞を買うとオマケにくれるのですが、前日の新聞での告知や当日売店で宣伝されるだけなので、知らない人も多いでしょう。

今年8月18日の地方紙「Il Resto del Carlino」の付録は、なんとロッセーニの室内楽 CD でした。前日の新聞で情報を得ていたので翌朝10部買い求め、オマケの CD も10枚もらいました。ツアーのサン・マリーノ共和国観光に通訳を兼ねて同行する日だったのでお客様全員にこれをプレゼントし、同じ宿の知人にも予備に買ったストックから差し上げました。

この CD は以前市販されたものではなく、後述するマルケ室内楽フェスティバルでの新録音のようです（録音年などの記載、製品番号、バーコードなし）。演奏者は日本でもロッセーニやオッフェンバックの録音で知られるピアニストのマルコ・ソッリーニを筆頭に、フランチェスコ・マラーナ（ヴァイオリン）、ダニーロ・スターニ（ホルン）、マッシモ・ポリドーリ（チェロ）、ファブリーツィオ・メローニ（クラリネット）、サルヴァトーレ・バルバータノ（ピアノ）の



6人で、ロッシーニ晩年の作品を中心に次の8曲が合計69分収録されています。

- 1) パガニーニへの一言 (ヴァイオリンとピアノのためのエレジー)
- 2) ヴァイオリンとピアノのためのオリジナル主題 (ジョヴァッキーノ・ジョヴァッキーニによる序奏と変奏)
- 3) ホルンとピアノのための前奏、主題と変奏
- 4) 一粒の涙 (チェロとピアノのための主題と変奏)
- 5) チェロとピアノのためのアレグロ・アジタート
- 6) クラリネットとピアノのための幻想曲
- 7) 四手ピアノのための小ファンファーレ
- 8) 行進曲 (パノルドゥブレ、四手ピアノ編曲)



若く優秀な奏者による演奏は活気があり、モダンな感覚で楽しめます。非売品でたった一日だけの付録ですから現在は入手不可能ですが、こういう幸運もあるのだということをお覚悟しておいてください。ちなみにロッシーニのCDが新聞付録になったのは筆者の知るかぎりこれが唯一で、ROFとは何の関係もありません。今回は、次に紹介するマルケ室内楽フェスティヴァルを広く知ってもらうためのタイアップと思われます。

▼マルケ室内楽フェスティヴァル「アルモニエ・デッラ・セーラ」▼

「アルモニエ・デッラ・セーラ (Armonie della sera)」は室内楽に特化した音楽祭で、マルケ州の南部、フェルモ県ポレンザーノ・ディ・フェルモを拠点に2005年、ピアニストのマルコ・ソッリーニが創設しました。情報だけは以前から得ていたのですが、私はまだ訪れたことがありません。はじめは会期も短く、演奏会の数も僅かでしたが、第8回となる今年の会期は7月7日～8月12日と1ヶ月を越え、数多くのコンサートが行われました。詳細は次のArmonie della seraのサイトをご覧ください。

イタリア語：<http://www.armoniedellasera.it/italiano/index.html>

英語：<http://www.armoniedellasera.it/english/index.html>

困ってしまうのはポレンザーノ・ディ・フェルモがどうしても行きにくい田舎町で、演奏会の会場も近隣の村に分散していること。村興し規模のイベントなので、よほど魅力的なプログラムでないと行く気になれません。「私は行ったことがある」という奇特な方がいらっしゃいましたら、是非レポートをお寄せください。

(2012年10月25日 水谷彰良)



◆ガゼッタ第8号◆



すっかり冬らしい季節になりましたね。みなさま風邪にお気をつけください。

ガゼッタ第8号をお届けします。本号は、ロッシーニのオペラ新譜DVD1点とCD2点を紹介します。

▼ROF2010年《シジスモンド》DVD&BD発売!▼

◎Rossini: Sigismondo.(Rossini Opera Festival 2010)

ロッシーニ：歌劇《シジスモンド》2010年ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル ダミアノ・ミキエレット(演出)、ミケーレ・マリオッティ(指揮)
ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団

主な配役

ダニエラ・バルチェッローナ (シジスモンド、メゾソプラノ)

オルガ・ペレチャツコ (アルディミーラ、ソプラノ)

アントニーノ・シラゲーザ (ラディスラオ、テノール)

マヌエラ・ビシェーリエ (アナジルダ、ソプラノ)

アンドレア・コンチェッティ (ウルデリーコ、バス) 他

(収録：2010年8月ペーザロ、ロッシーニ劇場)

[Arthaus Musik 108062](BD)

[Arthaus Musik 101648](DVD2枚組) どちらも日本語字幕付き



メルマガ第3号で紹介したROF《ゼルミーラ》の後も、ロッシーニの新譜発売が続いています。中でも出色なのが、このたび発売された一昨年ROFの《シジスモンド》の上演映像で、日本語字幕付きです。

この上演は、演出家ミキエレットが舞台を近代の精神病院に設定し、入院患者の助演たちにリアルな狂人ぶりを演じさせて批判の聲が上がりました。とりわけシラゲーザ演じるラディスラオ登場のソロの途中で助演が発した奇声には、観劇した筆者も心底驚きました。ジスモンド役のバルチェッローナも精神病患者の姿で、狂気をはらんだ表情と身振りで歌い続けます。「心を病むのと狂人は別だろ！」と言いたくなりますが、そんな批判を超

えて凄いと感心させられたのが、歌手たちの演劇的表現の見事さです。そんなところの歌手には絶対真似できないレベルが、そこで達成されているのです。ラディスラオを演じるシラグーザも声に力強さと輝きを増し、アジリタも完璧。

アルディミーラ役のペレチャツコも華麗な歌唱とテクニックが際立ち、他の共演者も充実しています（とりわけアナジルダ役のビシェーリエ）。過剰演出ではあっても、演劇的にも声楽的にもこれほど徹底した舞台は他にありません。指揮者マリオッティの緻密な音楽作りも素晴らしく、演奏面でも近年稀な名演と言えます。

演出については賛否があるでしょうが、個人的には1回目に「ぶっとび」、2回目に評価が逆転しました。ちなみにゼッダ先生も、「稽古を見てとんでもない演出だと思ったけれど、何度も観ているうちに素晴らしい舞台と判った。この《シジスモンド》は1回観たくらいじゃけっして理解できないね」と話してくれました。

演出については映像をご覧になれば判るので、以下、簡略な解説とあらすじを記しておきます。

■簡略作品解説

2幕のドランマ・ペル・ムジカ《シジスモンド》は、《タンクレーディ》（1813年）で大成功を収めたヴェネツィアのフェニーチェ劇場のために作曲した二つ目のオペラ・セーリア。その間にロッシーニは、《アルジェのイタリア女》《パルミラのアウレリアーノ》《イタリアのトルコ人》を発表しています。台本はジュゼッペ・フォッパ（Giuseppe Foppa, 1760-1845）が自作の悲劇『マティルデ、または森の女』（1807年）を改作したもので、「ポーランド物」は世紀末から1830年代にかけて前ロマンティックな題材として関心を集めました。けれども1814年12月26日にフェニーチェ劇場で行われた初演は失敗を喫し、1827年を最後にレパートリーから消え、1992年10月にロヴィーゴで蘇演されるまで165年間お蔵入りとなっていました。

■あらすじ

第1幕

ポーランド王シジスモンドは、宰相ラディスラオによって王妃アルディミーラが不貞をはたらいたと信じ、死刑を宣告した。だが彼女は貴族ゼノヴィートに救われ、その娘として森に隠れ住んでいた。後悔にかられ、悪夢に苦しむ王は、森の中で王妃と瓜二つの女を見つけるが、彼女はゼノヴィートの娘エジェリンダと名乗り、「王妃は邪悪な反逆者に殺された」と言ってラディスラオを驚かせる。同じ頃、アルディミーラの父でボヘミア王ウルデリーコは、娘の復讐のため戦いの準備を進めていた。

第2幕

王宮に来たエジェリンダを見た廷臣たちは彼女を王妃と認め、王妃万歳を叫ぶ。だが、シジスモンドから愛を告白され、王妃に求められたアルディミーラは苦悩する。そしてエジェリンダを連れたいシジスモンドがウルデリーコを訪れると、ウルデリーコは自分の娘そっくりであることに当惑しながらも、シジスモンドに宣戦布告する。ポーランド軍が敗北し、シジスモンドが危機に陥ったとき、ラディスラオに追われたアルディミーラが駆け込んでくる。詰問されたラディスラオが自分の悪事を白状するとアルディミーラも夫を許し、ウルデリーコも彼女を実の娘と認めて和解が成立する。

▼《なりゆき泥棒》の新譜 CD▼

◎Rossini: L'occasione fa il ladro.

ロッシーニ：歌劇《なりゆき泥棒》2005年7月バート・ヴィルトバート上演ライブ
アントニーノ・フォリアーニ指揮ヴェルテンベルク・フィルハーモニー管弦楽団
エリザベッタ・マルティロージャン(S) ファニー・アントネロウ(Ms) ガーダー・トール・コーテス(T) ジャンピエーロ・ルッジェーリ(Br)他 (録音：2005年7月バート・ヴィルトバート)

[Naxos 8.660314-15]CD2枚組



これは2005年「ヴィルトバートのロッシーニ」音楽祭のライブ録音で、ベレニーチェ役のアメリカーナマルティロージャンを筆頭に国際色豊かな若い歌手が演じています。総じて発声が非イタリア的で、言葉の発音も怪しいのですが、生き活きとした演唱とライブの臨場感は評価できます。指揮者フォリアーニもツボを押さえたテンポと解釈で好サポート。この1幕ファルサのCDは1992年の録音が最後でしたから、久々の新録音となります。

簡単なあらすじを記しておきましょう。

■あらすじ

嵐の夜の旅籠。ドン・パルメニオーネは雨宿りに来たアルベルト伯爵から結婚のためナポリへ行くと聞かされる。伯爵は慌しく立ち去るが、召使が二人の鞆を取り違え、美しい女性の肖像を見つけたパルメニオーネは伯爵を騙って彼女と結婚しようと思いつく。一方ベレニーチェの家では、婚約者の顔を知らぬベレニーチェが男の誠実さを観察するべくエルネステーナと服を交換して待ち受ける。最初に来た贋伯爵パルメニオーネは、肖像と顔が違うと思いつつもエルネステーナに求婚し、彼女も贋伯爵に惚れてしまう。遅れて現れた本物の伯爵はベレニーチェを婚約者と認めて求婚するが、あなたの花嫁は他にいると言われてしまう。ベレニーチェの叔父ドン・エウゼーピオも加わって一同混乱すると、エルネステーナが伯爵の妹と判明して二組の結婚がまとまる。

▼《パルミラのアウレリアーノ》の新譜 CD▼

◎Rossini: Aureliano in Palmira

ロッシーニ：歌劇《パルミラのアウレリアーノ》スタジオ録音

マウリツィオ・ベニーニ指揮 ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、ジェフリー・ミッチェル合唱団 ケネス・ターヴァー(T) カトリオナ・スミス(S) シルヴィア・トロ・サンタフェ(Ms) エズギ・クトウル(S) ジュリアン・アレクサンダー・スミス(T)他

〈収録：2010年10月ロンドン(スタジオ録音)〉

[Opera rara ORC46](CD3枚組)



大成功を収めた《試金石》に続いてロッシーニがミラノのスカラ座のために作曲した2幕のドラマ・セーリオ・ペル・ムジカで、台本は新人のフェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865) が手がけました。この作品はカストラートを起用した唯一のロッシーニ作品としても知られますが、ドラマは旧弊で、1813年12月26日にスカラ座で行われた初演も十分な成功を得られませんでした。けれども音楽は充実しており、《タンクレーディ》からの転用に加え、後の《イギリス女王エリザベッタ》と《セビーリャの理髪師》に再使用される楽曲もあります。この点は前記《シジスモンド》も同じで、初めての方でも幾つかの音楽は聴き馴染みがあるはずです。

簡単なあらすじを記しておきましょう。

■あらすじ

第1幕

ローマ軍の侵略を前に、パルミラの女王ゼノービアがペルシア王子アルサーチェに援護を求め、互いに愛を誓う。だが、アルサーチェはアウレリアーノ (ローマ皇帝アウリアヌス) との戦いに敗れ、投獄されてしまう。皇帝に謁見したゼノービアはアルサーチェの釈放を求めるが、アルサーチェへの愛を諦めれば捕虜を釈放すると言われてこれを拒否し、牢獄で面会したアルサーチェに救出を約束する。

第2幕

ローマ軍の攻撃でパルミラは陥落したが、アウレリアーノから再び愛を受け入れるよう求められたゼノービアはこれを拒否する。牢獄から逃亡したアルサーチェは兵を起こして反撃するも、再び敗れて捕虜となり、ゼノービアと再会する。二人は死を覚悟するが、アルサーチェを愛するプブリアの嘆願を受けたアウレリアーノは寛大さを示し、ローマへの忠誠を条件にアルサーチェとゼノービアを許し、二人はパルミラの支配権を取り戻す。

これはスタジオ録音の全曲盤で、ベニーニの指揮もなかなか良いのですが、同じレーベルの他のロッシーニ録音に比して歌手の水準の低いのが問題です。とくにいけないのがアルサーチェを歌うトロ・サンタフェで、ヴィブラート過多で聞き苦しく、ゼノービア役のスミスも声の線が細くて物足りません。この作品は別プロダクションの上演映像が発売されましたので (2011年ヴァッレ・ディトリア音楽祭の上演 DVD)、慌てて CD を買う必要はないかもしれませんね。この DVD については、次号に紹介させていただきます。

(2012年11月5日 水谷彰良)



ガゼッタ第9号をお届けします。

11月26日の日本ロッシーニ協会定期演奏会、オペラ《セミラーミデ》抜粋の準備が進んでいます。装飾歌唱と超絶技巧のオンパレードで、出演者はみな忙しい人たちばかり。どうなることかと心配ですが、彼らもプロ中のプロですから、火事場のなんとやらできっと素晴らしい歌唱を聴かせてくれるでしょう。

かくいう筆者も請負い原稿や論文の締め切りに終われ、『ロッシニアーナ』に加えて今度の演奏会のプログラムも作らねばならず、どうにもならない状況に追い込まれています。

演奏会のプログラム解説は簡略なので、別に HP に詳細な《セミラーミデ》の解説を載せるべくその執筆を優先しました。というわけで、本号は新発売《パルミラのアウレリアーノ》DVDの簡単な紹介でお許しください。

▼ヴァッレ・ディトリア音楽祭 2011年《パルミラのアウレリアーノ》DVD発売!▼

◎Rossini: Aureliano in Palmira.(Festival della Valle d'Itria 2011)

ロッシーニ：歌劇《パルミラのアウレリアーノ》2011年7月マルティーナ・フランカ「ヴァッレ・ディトリア・フェスティヴァル」上演

ティモシー・ネルソン(演出)、ジャコモ・サグリパンティ (指揮)、イタリア国際管弦楽団、ブラティスラヴァ・スロヴァキア合唱団 ボグダン・ミハイ (アウレリアーノ、テノール)、マリア・アレイダ (ゼノービア、ソプラノ)、フランコ・ファジョーリ (アルサーチェ、カウンターテナー)、アスデ・カラヤヴス (プブリア、メゾソプラノ) ほか

〈収録：2011年7月マルティーナ・フランカ〉
[Bongiovanni AB 20022](DVD) 海外盤

作品の説明と簡単なあらすじはメルマガ第8号で紹介したので省略します。そのとき予告した上演映像が、この《パルミラのアウレリアーノ》というわけです。

ヴァッレ・ディトリア・フェスティヴァルは、南イタリアのマルティーナ・フランカで開催される音楽祭。オペラの復活上演や演奏機会の乏しい作品の紹介に定評があり、マニアックな筆者はロッシーニのパステッチョ《イヴァノエ》と《ロベール・ブリュス》、マイヤベーア《ユグノー教徒》などレアな作品を観劇しに何度も訪れましたが、ある段階から演奏水準がガクンと落ちたためここ数年パスしてきました。

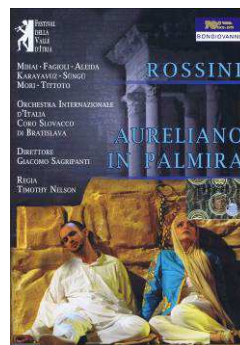
今回発売されたのは昨年7月の上演映像。会場はいつものドゥカーレ宮殿の中庭で、狭いオーブンステージなのですが、映像で見ると何の問題もありません。ティモシー・ネルソンの演出も、洗練された構図と装置で舞台となるパルミラ（現在はシリアに属する古代都市タドモル）の情景を美しく見せてくれます。

なにより驚いたのは歌手と演奏レヴェルの高さで、これならまた行かねば、と思わせるだけのものがあります。とりわけ素晴らしいのがアルサーチェ役のフランコ・ファジョーリで、卓越したカストラートのジョヴァンニ・バッティスタ・ヴェッルーティ（1780-1861）のために書かれたパートを女性コントラルトと遜色の無い声で歌っています。メッサ・ディ・ヴォーチェやアジリタの技術も万全で聴き応え充分。

ゼノービア役のマリア・アレイダも、今年ペーザロの《ブルスキーノ氏》は散々な状態で筆者は「デビュー前に壊れたキャスリーン・バトル」との感想を持ちましたが、《パルミラのアウレリアーノ》では美声と高音域の歌唱に彼女の美質が聴き取れます。アウレリアーノ役のテノール、ボグダン・ミハイは昨年ROFの《ブルグントのアデライデ》アデルベルト役が筆者の初聴き。まだ若く、コロラトゥーラのテクニックは未完成ながら声質が良く、発声の基礎もきちんとしているので今後どんどん伸びることでしょう。なお、この上演にはリチニオ役で森雅史も出演しています。

総じて前回紹介した Opera rara の全曲スタジオ録音より上を行き、上演映像ならではの利点もありますので、最初を買うならこのDVDがお薦め。日本語字幕はありませんが、ブックレットにはあらすじの日本語訳も掲載されています。

(2012年11月15日 水谷彰良)



◆ガゼッタ第10号◆

ガゼッタ第10号をお届けします。

今回は、直近11月26日の日本ロッシーニ協会定期演奏会、オペラ《セミラーミデ》抜粋の演奏曲目発表です。

▼日本ロッシーニ協会演奏会「オペラ《セミラーミデ》抜粋」の演奏曲目発表！▼

「日本初演」とはうたいませんが、まとまった楽曲セレクションは日本初となる私たちの「オペラ《セミラーミデ》抜粋」。その演奏曲が確定しましたので、発表させていただきます。

このオペラ、実は初演シーズンからさまざまなカットが施されており、完全なノーカット演奏は今年7月にドイツのヴィルトバートで行われた演奏会が最初でした（7月19日と22日）。詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.rossini-in-wildbad.de/en/program-news/program-2012/opern/semiramide.html>

ドイツ・ロッシーニ協会事務局長から来たメールによれば、歌詞の一つも音楽の1小節もカットしない演奏を行い、4時間かかったそうです（休憩は別にして演奏のみ！）。そんな長尺の作品ですから、日本ロッシーニ協会では最初からピアノ伴奏の楽曲セレクションによる抜粋演奏としました。

幸いこのオペラは古典的な構成をとり、序曲、第1幕の導入曲とフィナーレ、第2幕のフィナーレ以外はすべてアリアと二重唱です。ならばそれを全部取り上げ、導入曲の主部をなすアンサンブルと合唱も演奏しようと考えました。以下がその曲目です。大半を網羅しましたが、長い前奏を刈り込み、シェーナをカットする工夫あつてのことです。

【第1幕 Atto primo】

N. 1 導入曲より：三重唱「彼方のガンジスより」～合唱と四重唱「多くの王と民衆が」

Introduzione: “Là dal Gange”～ “Di tanti regi e popoli” 天羽明恵 小山陽二郎 須藤慎吾 小田桐貴樹 合唱

N. 2 アルサーチェのカヴァティーナ 「ああ！ あの日を絶えず思い出す」

Cavatina Arsace: “Ah! quel giorno ognor rammento” 米谷朋子

N. 3 アルサーチェとアッスールの二重唱 「神々の美しき姿」

Duetto Arsace - Assur: “Bella immagine degli Dei” 阪口直子 須藤慎吾

N. 4 イドレーノのアリア 「ああ、試練はどこに？」
Aria Idreno: “Ah dov'è il cimento?” 小山陽二郎

N. 5 女声合唱 「まなごしは晴れやかに」とセミラーミデのカヴァティーナ 「麗しく美しい光が」
Coro di donne e Cavatina Semiramide: “Serena i vaghi rai”～“Bel raggio lusinghier” 家田紀子 女声合唱

N. 6 セミラーミデとアルサーチェの小二重唱 「忠実な心を持ち続け」
Duetto Semiramide - Arsace: “Serbami ognor sì fido il cor” 天羽明恵 米谷朋子

—— 休憩 (N.7 第1幕フィナーレはすべてカット) ——

【第2幕 Atto secondo】

N.8 セミラーミデとアッスールの二重唱 「もしも命が大切なら」
Duetto Semiramide - Assur: “Se la vita ancor t'è cara” 家田紀子 須藤慎吾

N.9 シェーナの末尾とアルサーチェのアリア 「この酷き災いの中で」
Scena [ultima parte] e Aria Arsace: “In sì barbara sciagura” 阪口直子 男声合唱

N.10 イドレーノのアリア 「とても甘美な希望が」
Aria Idreno: “La speranza più soave” 中井亮一 合唱

N.11 レチタティーヴォの末尾、セミラーミデとアルサーチェの二重唱 「よろしい...手を下しなさい」
Duetto Semiramide - Arsace: “Ebbene ...a te: ferisci” 天羽明恵 阪口直子

N.12 シェーナ、合唱、アッスールのアリア 「ああ！...止める...気を鎮め...許してくれ...」
Scena: “Il dì già cade”, Coro, e Aria Assur: ”Deh!...ti ferma...ti placa...perdona...” 須藤慎吾 男声合唱

N.13 第2幕フィナーレより：末尾の合唱 「来るのです、アルサーチェ、凱旋し、王宮に」
Finale II: [～Coro ultimo: “Vieni Arsace, al trionfo, alla reggia”] 全員

ピアノ伴奏 金井紀子

合唱 武部裕美、柏川翠、片岡美里、岩谷美津子、中川誠宏、工藤翔陽、山下友輔、小野寺光

開演は18時30分ジャスト。筆者（水谷）の舞台解説も極限まで切り詰め、21時ジャストに終演予定です。とにかくロッシニの音楽が素晴らしい……そしてこれを歌う歌手たちも……とはいえ結果がすべてですから、ご来場いただいたお客様に満足いただける演奏を心がけるばかりです。

追伸：

《セミラーミデ》の全集版総譜は2001年にロッシニ財団から出版済みですが（Philip Gossett e Alberto Zedda 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 2001.）、批判校訂版のピアノ伴奏譜は未出版です。この演奏会ではリコルディ社による1875年の新版をベースに、全集版を参照して修正した楽譜で演奏します。

研究紀要『ロッシニアーナ』第33号は12月10日に発行予定。今年最後の例会は12月22日にオカモトヤで開催します。例会の詳細はHPをご覧ください。

(2012年11月25日 水谷彰良)